

安楽死容認の難しさ

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

ファーボのケース

イタリアでは近年、安楽死が大きな社会問題となっている。この問題に人々の注目が集まった出来事は、ディスクジョッキーの司会者だったファビアーノ・アントニアーニ（通称ファーボ）の安楽死であった。ファーボは2014年6月13日、仕事を終えて帰宅途中、ミラノ郊外で運転を誤り、前方から来た車と正面衝突した。その結果、車は大破、本人は失明し、寝たきりの状態になってしまった。彼は、イタリア大統領宛に手紙を出して、「苦しまずに、死ぬ方法を選びたい」と訴えた。大統領からの返事はなく、そこで彼は彼の母と婚約者に死を選ぶと宣言。婚約者は、「安楽死」を推進する「ルーカ・コジョーニ協会」にファーボを登録し、安楽死への道を選択した。同協会は慎重に彼を診察し、またその意思を何度も確認した。

実を言うと、イタリアではまだ安楽死が認められていない。当時、安楽死を法的に認めていたヨーロッパの国は、オランダ、ベルギー、スイス、ドイツであった。ファーボは2017年2月26日、同協会のマルコ・カップパートの誘導で、スイスのチューリッヒ郊外のディグニタス病院に到着した。到着後すぐに診察と面談が行われ、死の希望が強いことが確認されたので、ファーボは致死薬を呑み、翌27日午前11時40分に息を引き取った。40歳だった。

マルコ・カップパートはその後、ミラノ警察に対して、イタリア民法580条に反して自殺を幫助したことを2月28日に自己申告した。同年7月13日、ミラノ検察庁は、この成り行きを文章化するように求めた。しかし、これはカップパート側から拒否された。そのため、カップパートの裁判は延期された。2018年1月17日、ミラノ検察庁の代理人ティツィアーナ・シチリアーノはマルコ・カップパートの「尊厳の権利の存在」を主張して、無罪とすると宣言した。しかし、2月24日になってミラノの控訴院が、この件は法に照らして再審議すべきだと述べたので、4月3日、政府はミラノの弁護団に、自殺幫助罪がある以上、これに服すべきであるとの声明を発表。その後、下院で審議されたものの、決着がつかず、議論は持越しになった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、裁判が延び延びになり、今もってその法廷は開かれていない。

ファーボの件は、マスコミに大きく取り上げられたが、一方で、闇から闇へと葬り去られた例は少なくない。イタリアでは、2016年にスイスに渡航して安楽死を選んだ人は150人に上る。安楽死を得るための直接費用は1万ユーロ。それにスイスまでの交通費、また滞在費も加算されたら相当の金額になる。誰にでもできるものではない。

一方、安楽死を求めない人も多い。その一例を記そう。2019年8月13日に亡くなったナディア・トッファという女性がそうだった。彼女はテレビ番組「レ・イエーネ」の司会者だったが、脳腫瘍になって苦しい思いをした。しかし、そういう状態でも、常に元気に明るく振る舞い、笑顔を絶やさなかった。「私たちが患者は闘士である」とも語っていた。彼女の通っていた教会の主任司祭は、「ナディアは肉体的、精神的苦しみの中にあっても、希望は失わなかった。安楽死を求めるといふ考えは彼女にはなかった。神は彼女のそばにいたのだろう。」と述懐している。

オランダの現状

世界で最初に安楽死を容認し、合法化したオランダの現状はどうだろうか。2019年5月31日に、食事を摂ること、水を飲むことを拒否したノア・ポトーフエンは、どんどん容体が悪化して、1週間後の6月6日、17歳の短い人生を閉じた。

彼女は10代前半の多感な時期に何度も性的暴力を受けた。それがトラウマとなって、人生を悲観するようになった。彼女はついに死を希望し、近くの病院で安楽死を願ったが拒否された。その病院は、デン・ハーグのレフェンザインデ病院。ここは安楽死を主とする病院で、現在60人の安楽死に関わる医師がいる。その後彼女は何度も自殺を図ったが、死にきれなかった。そこで、17歳の時に上に述べたような形で自ら死を選んだのだ。その後、オランダの保健省により公式に調査がなされ、彼女の死の過程を明らかにするように求めた。オランダでは、安楽死が2007年に比べて230%の増加である。レフェンザインデ病院では2017年、750人もの人が安楽死を選んでいる。

ヴァチカンの反応

ノアの安楽死問題について、ヴァチカンでもただちに反応した。ヴィンチェンツォ・パリア大司教は、この悲劇は社会の偽善のヴェールを剥がすものだと言った。彼女が受けた暴行の痛み、憂鬱状態、食欲不振と死に至るまで放置されたこと、これはまさにヨーロッパ社会の敗北だと言う。以下は、ヴィンチェンツォ・パリア大司教に対する新聞記者のインタビューから。

問：ノアは安楽死でもなかったし、自殺幫助でもありませんでした。死ぬがままに放置されていました。

答：社会はこの事件を止めることができなかった。それは社会が弱まったからです。ヨーロッパにおいて、将来の喪失ということが、若者を鞭打っています。

問：若者の自殺というものは未知ではありません。文学にも描かれていますか…。

答：自殺というものは、ここ数十年の新しいドラマチックな方法を思い出させます。父の蒸発を話す時、その時に話せなかったことが、今になって話すことができるのです。これは大人の世界の一般的な出来事です。しかし、若者世代の孤独は今のほうがはるかに強い。

問：大人はなぜ若者に何も伝えられないのでしょうか。

答：それは、若者が今では孤児のようになっているからです。この状況を打開するためには、政界、経済界、教育界、宗教界からのアプローチが必要でしょう。生存が困難な状況であっても、若者に生への責任を持ってもらうべきです。そのために今、ヴァチカンにおいて、「若者」を議題にした教会公会議が開かれています。

問：心の痛みは、肉体の痛みより耐えられないものなのでしょうか。

答：必ずしもそうではありません。時に心の痛みは、肉体の痛みよりはるかに辛い時があるでしょう。薬が肉体の痛みを救うならば、心の痛みは、配慮や心がけ、そして愛情によってのみ救われるのです。これらのものが心の痛みを治療することができるのです。私たちは、孤児のように生きている若者たちを救わなければなりません。